かはやなぎ（ねこやなぎ）

山の際に　雪は降りつつ　しかすがに
この河楊は　萌えにけるかも

（10・一八四八）

（訳）　山には、まだ雪が降ってはいるが、さすがに春が近くなったので、ここのカワヤナギの芽がふくらんできた。

（用字）河楊・川楊
（和名）ねこやなぎ――やなぎ科
（産地）北海道・本州・四国・九州

かわらふじ（じゃけついばら）

皂莢に　延ひおほどれる　屎葛
絶ゆることなく　宮仕せむ

高宮王

（16・三八五五）

（訳）　カワラフジに、まといつきひろがり乱れている屎葛のつるが、絶えないように、絶えることなく、いつまでもお仕えしよう。

（用字）皂莢
（和名）じゃけついばら――まめ科（じゃけついばら亜科）
（産地）本州・四国・九州

か へ（このてがしわ）

ほととぎす　来鳴く五月に……
見が欲し御面　直向ひ　見む時までは
松柏の　栄えいまさね　尊きわが君

大伴家持
（19・四一六九）

（訳）ほととぎすが来て鳴く五月に……見たいと思うあなたのお顔を、じかに向って見る時までは、どうか松やカエのように、変らず栄えておいで下さい。尊い母上よ。

（用字）柏
（和名）このてがしわ――ひのき科
（産地）栽植（原産・中国）。

か へ（かや）

……直向ひ　見む時までは　松柏の
栄えいまさね　尊き吾が君

大伴家持
（19・四一六九）

（訳）長歌の一部に付き省略
（用字）柏
（和名）かや――いちい科
（産地）本州・四国・九州

かへるで（かえで類）

わが屋戸に　黄変づ鶏冠木　見るごとに
妹を懸けつつ　恋ひぬ日はなし

田村大嬢
（8・一六二三）

（訳）うちの庭のカエルデの色づいたのを見るたびに、彼女のことを心にかけて、慕わしく思わない日はない。

（用字）鶏冠木・加敝流氏・蝦手
（和名）かえで・やまもみじ・いろはもみじ――かえで科
（産地）本州・四国・九州
（用途）材は建築・器具

かほばな（ひるがお）

高円の　野辺の容花　おもかげに
見えつつ妹は　忘れかねつも

大伴家持
（8・一六三〇）

（訳）高円の野に咲くカオバナのように、彼女の顔がちらついて、忘れることができないよ。

（用字）容花・可保婆奈・可保波奈
（和名）ひるがお――ひるがお科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）全草採集乾燥・疲労を医し、精気を益す（強壮薬）

からあゐ（けいとう）

秋さらば　移しもせむと　吾が蒔きし
韓藍の花を　誰か採みけむ

（7・一三六二）

（訳）秋になったら移し、深めにしようしようと、私がまいたカラアイの花を、一体誰が摘んでしまったのだろう。

（用字）韓藍・鶏冠草
（和名）けいとう――ひゆ科
（産地）栽植（原産・インド）
（用途）染色に用いた

からたち

枳の　棘原刈り除け　倉立てむ
屎遠くまれ　櫛つくる力自

忌部首

（18・三八三二）

（訳）カラタチを刈り払って、倉を建てようと思う。用たしは遠くでやりなさいよ。櫛を作っているおばさん。

（用字）枳
（和名）からたち――みかん科
（産地）栽植（原産・北中国）
（用途）果実は香りがよいが食用にはならない。薬用とした

き　み（きび）

古りにし人の　食せる吉備の酒
病めばすべなし　貫簀賜らむ

丹生女王
（4・五五四）

（訳）昔なじみの人が下さったキビの酒であるから、いただいて、病気にでもなったら困るので、その時のために手洗の簀の子を下さい。

（用字）吉備・寸三
（和名）きび――かほん科
（産地）栽植（原産・インド）
（用途）食用とした。

くくみら（にら）

伎波都久の　岡の茎韮　我摘めど
籠に満た無ふ　夫と摘まさぬ

（14・三四四四）

（訳）伎波都久の岡のククミラをいくら摘んでも篭に一杯にならない。それなら彼と一緒に摘んでみたらいかが。

（用字）久君美良・茎韮
（和名）にら――ゆり科
（産地）北海道・本州・九州
（用途）山野にも自生するが多くは栽培され若芽を食用とした

くず

雁がねの　寒く鳴きしゆ　水茎の
岡の葛葉は　色づきにけり

（10・二二〇八）

（訳）雁の声が寒々と冴えて聞こえるようになってから（水茎の）岡のクズの葉は目立って色づいてきた。

（用字）葛・久受・田葛・真葛

（和名）くず――まめ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）根からくず粉をとり、食用とし、茎の繊維で葛布も織った。

くそかずら（へくそかずら）

皂莢に　延ひおほどれる　屎葛
絶ゆることなく　宮仕せむ

高松王

（16・三八五五）

（訳）かわらふじに、まといつき、ひろがり乱れているクソカズラのつるが絶えないように、絶えることなく、いつまでもお仕えをしよう。

（用字）屎葛

（和名）へくそかずら――アカネ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（特徴）茎に臭気がある

くは（くわ）

たらちねの　母のその業の　桑すらに
願へば衣に　着るとふものを

（7・一三五七）

（訳）（たらちねの）母が自分の仕事のためにと植えてあるクワでさえも、願えば絹の着物にして、着せてくれるというのに。

（用字）桑・具波

（和名）やまぐわ――くわ科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）葉をかいこのえさとした。

くり

瓜食めば　子等思ほゆ
栗食めば　況して思ばゆ
何処より　来りしものぞ
眼交に　もとな懸りて　安眠し宿さぬ

山上憶良

（5・八〇二）

（訳）瓜やクリを食べると我が子のことが思い出される。子どもというものは一体どこから来たのかしら、目の前に心もとなくちらついて床に入っても安眠できない。

（用字）栗・久利。

（和名）くり――ぶな科。

（産地）北海道・本州・四国・九州。

（用途）美味しい果実の一つとした

くれない（べにばな）

黒牛の海　くれなゐ匂ふ　百磯城の
大宮人し　あさりすらしも

（7・一二一八）

（訳）　黒牛の浜にクレナイの色が映えている（百磯城の）大宮人たちが、貝拾いをしているようだ。

（用字）紅・呉藍・久礼奈為。
（和名）べにばな――きく科。
（産地）栽植（原産・エジプト）
（用途）花を染料に用いた。

こけ（こけ類）

何時の間も　神さびけるか　香具山の
鉾杉が本に　蒴生すまでに

鴨君足人

（3・二五九）

（訳）　いつの間にこんなに古めかしくなったのだろうか、香具山の鉾杉の根元にコケが生える程に。

（用字）蒴・苔・蘿。
（和名）こけ――すぎごけ科・ぜにごけ科。
（産地）北海道・本州・四国・九州。

ごどう（あおぎり）

梧桐の日本琴一面
この琴夢に　娘子に成りて曰はく

大伴淡等（旅人）
（5・八一〇）

（訳）　歌の序に付き省略。

（用字）梧桐
（和名）あおぎり――あおぎり科・きり――ごまのはぐさ科
（産地）栽植（原産・中国）
（用途）材は建具・家具とした。琴にもした。（きり）

こなぎ

上毛野　伊香保の沼に　殖子水葱
かく恋ひむとや　種求めけむ

（13・三四一五）

（訳）　上野国の伊香保の沼に植えるコナギではないが、こんなに恋に苦しもうとて、私はこの種を求めたであろうか。

（用字）子水葱。
（和名）コナギ―みずあおい科。
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）葉をゆでて、食用とした
り染料とした

こなら

下毛野(正)の　美可母の山の　小楢如す
まぐはし児ろは　誰が笥か持たむ

（14・三四二四）

（訳）下毛野の美可毛の山のコナラのように可愛らしく美しい娘は、誰の箱を持つのだろう。（誰の妻になるのだろう）

（用字）小楢・許奈良。

（和名）こなら――ぶな科。

（産地）北海道・本州・四国・九州。

このてがしは

奈良山の　児手柏の　両面に
かにもかくにも　佞人の徒

（16・三八三六）

（訳）奈良山のコノテガシワが、表裏に著しい違いがあるように、とにもかくにも、口先と腹の中とのちがいが激しい連中である。

（用字）児手柏・古之・加之波

（和名）このてがしわ――ひのき科

（産地）栽植（原産・中国）

こも（まこも）

飼飯の海の　庭好くあらし　刈薦の
乱れ出づ見ゆ　海人の釣船

柿本人麿
（3・二五六）

（訳）飼飯の海の海面が静かであるようだ。（刈りゴモの）海人の釣舟が数多く入り乱れて漕ぎでて行くのが見える。

（用字）薦・許母・許毛
（和名）まこも――かほん科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）こもやむしろを織った。実は食用とした

さいかち

皂莢に　延ひおほどれる　屎葛
絶ゆることなく　宮仕せむ

高宮王
（16・三八五五）

（訳）サイカチにまといつき、ひろがり乱れている屎葛のつるが絶えないように、絶えることなく、いつまでもお仕えしよう。

（用字）皂莢
（和名）さいかち――まめ科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）果実は薬用・さやは石けんの代用とした

さかき

ひさかたの　天の原ゆ生れ来る　神の命
奥山の賢木の枝に　白香著け
木綿とりつけて

坂上郎女
（3・三七九）

（訳）（ひさかたの）高天原に生まれた神が奥山のサカキの枝に白香をとりつけ、又木綿をもつるして……

（用字）賢木・栄木・神木

（和名）さかき・まさかき――つばき科

（用途）神祭の木とした

さきくさ（みつまた）

……夕になれば　いざ寝よと　手を携はり
父母も　側はな離り　三枝の中にを寝むと

山上憶良
（5・九〇四）

（訳）夕方になると、さあ寝ようと、親の手を握り、父も母もそばにいてくれと（サキクサの）両親にはさまれて寝ようと。

（用字）三枝

（和名）みつまた――じんちょうげ科

（産地）九州・四国（本州は栽植）

（用途）樹皮の繊維は強く良質で製紙の材料とした

さくら

春雨に　争ひかねて　吾が屋前の
桜の花は　咲き始めにけり

（10・一八六九）

（訳）　春雨についさそわれて（抵抗しかねて）私の家の庭先のサクラの花が咲きだしてきた。

（用字）佐久良・佐具良・作楽・桜

（和名）やまざくら――ばら科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）果実を食用とした。

さ　さ（ささ類）

小竹の葉は　み山もさやに　さやけども
吾は妹思ふ　別れ来ぬれば

柿本人麿

（2・一三三）

（訳）　ササの葉は、山全体をざわざわさせて、風に乱れているが、別れてきた妹のことを慕う気持で一ぱいだ。

（用字）小竹・佐々

（和名）ささ（総称）・くまざさ――かほん科

（産地）本州・九州

さなかづら（さねかずら）

あしひきの　山さな葛　もみつ（紅葉）まで
妹に逢はずや　わが恋ひ居らむ
（10・二二九六）

（訳）サナカズラの葉が色づくまで、彼女に逢わずに、私はこのまま恋う思いを続けねばならぬだろうか。

（用字）狭根葛・核葛・佐奈葛・狭名葛・左名葛

（和名）さねかずら――もくれん科

（産地）本州・四国・九州

（用途）茎や葉の溶粘液を頭髪をくしけずるのに用いたり、薬用とした（滋養・強壮・鎮咳薬）

さはあららぎ（さわひよどり）

黄葉せる沢蘭一株を　抜き取りて
内侍佐々木山君に　持たしめ……
（19・四二六八の序）

（訳）考~~譲~~（正）謙天皇と光明皇后が、藤原家は大納言藤原仲麻呂の家においでなされ、サワアララギの草紅葉に目をとめられて、これを抜き取り、内侍に持たしめて…

（用字）沢蘭

（和名）さわひよどり――きく科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）根を採集乾燥、疲労を医し、精気を益す（強壮薬）

しきみ

奥山の　榊の花の　名の如や
しくしく君に　恋ひわたりなむ

大原真人今城
（20・四四七六）

（訳）奥山のシキミの花の名のように、しきりにあなたを恋いつづけることだろう。
（用字）之伎美
（和名）しきみ――もくれん科
（産地）本州・四国・九州
（用途）生葉を仏前にそなえたり、抹香を作る

しだくさ（のきしのぶ）

我が屋戸は　軒の子太草生ふれど
恋忘草見るに　未（正）だ生ひず
（11・二四七五）

（訳）私の家のシダクサは成長したが、恋忘草の方は、よくみても、まだ伸びない。
（用字）子太草
（和名）のきしのぶ――うらぼし科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（その他）風流人は、いかにも古めかしい感じを出させるために、これを門の軒などに植えることもある。

しば

立ち易り　古きみやこと　なりぬれば
道の芝草　長く生ひにけり

（6・一〇四八）

（訳）移り変って、りっぱであった奈良の都も、古い都になってしまったので、道のシバクサが、長くはびこるようになった。

（用字）芝・柴・志婆・之婆・志波

（和名）しば――かほん科（雑草の総称）

（産地）北海道・本州・四国・九州

しひ（しい）

家にあれば　筒にもる飯を　草枕
旅にしあれば　椎の葉にもる

有馬皇子

（2・一四二）

（訳）平生・家居のときは、食器にもって御飯をいただくのに（草枕）旅に出ると、食器代りに、シイの葉にのせて食事をする。

（用字）椎・思比・四比

（和名）しい――ぶな科

（産地）本州・四国・九州

（用途）樹皮は染色。果実は食用とした

しらかし

あしひきの　山道も知らず
白檀の　枝もとををに　雪の降れれば

柿本人麿
（10・二三一五）

（訳）　シラカシの枝もたわむほどに大雪が降ったので、（あしひきの）歩いている山道がわからなくなった。

（用字）白杜・白檀
（和名）しらかし――ぶな科
（産地）本州・四国・九州
（用途）槍の柄や木刀などに用いた

しりくさ（さんかくい）

潮葦に　交れる草の　知草の人
みな知りぬ　吾が下思

（11・二四六八）

（訳）　水門（みなと）の葦にまじっているシリクサ、その名のように、人はみな知ってしまった。誰にも知られぬようにしていた恋だのに。

（用字）知草
（和名）さんかくい――かやつりぐさ科
（産地）九州・他は主として栽植
（用途）ムシロなどを織るのに利用された

すぎ

いにしへの　人の植ゑけむ　杉が枝に
霞たなびく　春は来ぬらし

柿本人麿
（10・一八一四）

（訳）　昔の人が植えたスギであるといわれているその枝に霞がたなびいている。春になったのだなあ。

（用字）杉・椙・須疑
（和名）すぎ――すぎ科
（産地）九州・他は主に栽植
（用途）建築材とした

すげ

三島菅　いまだ苗なり　時待たば
著ずやなりなむ　三島菅笠

（11・二八三六）

（訳）　三島スゲはまだ苗であるが、成長するのを待っていたならば、三島スゲ笠を私がかぶることはできないだろう。

（用字）菅・須気
（和名）すげ――かやつりぐさ科
（産地）北海道・本州・四国・九州
（用途）菅笠を作った

す　ず（すずたけ類）

み薦刈る　信濃の真弓　わが引かば
うま人さびて　否と言はむかも

久米禅師
（2・九六）

（訳）（ミスズ刈る）信濃の国の弓をひくように、あなたの心を引いてみたら、貴人ぶって、いやとおっしゃるだろうね。

（用字）薦

（和名）やのたけ・すずたけ――かほん科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）茎は弓矢に使用

す　す　き

めづらしき　君が家なる　はなすすき
穂に出づる秋の　過ぐらく惜しも

石川広成
（8・一六〇一）

（訳）あなたのお宅の、めずらしい花ススキが穂を出す。秋が過ぎてゆくのが惜しい。

（用字）須々伎・須々吉・須為寸・須酒伎・為々寸

（和名）すすき・おばな――かほん科

（産地）北海道・本州・四国・九州

（用途）秋を飾る草の代表とした

すみれ

春の野に　菫摘みにと　来し吾ぞ
野をなつかしみ　一夜寝にける

山部赤人
（8・一四二四）

（訳）春の野にスミレを摘もうと出かけた私は、野のふんい気が好きになって一晩野宿してしまった。

（用字）菫・須美礼
（和名）すみれ――すみれ科
（産地）北海道・本州・四国九州
（用途）新芽を食用とした

すもも

わが園の　李の花か　庭に散る
はだれのいまだ　残りたるかも

大伴家持
（19・四一四〇）

（訳）私の家の庭に白くみえるのはスモモの落花だろうかそれともはらはらと降る淡雪のまだ消え残っているのだろうか。

（用字）李
（和名）すもも――バラ科
（産地）栽植（原産・中国）
（用途）果実を食用とした